
孤独の叫び

裏陥駒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独の叫び

【Nコード】

N0361B

【作者名】

裏陥駒

【あらすじ】

人を殺して独房で孤独に過ごしていた獵山、後二十日で釈放の所で、一人の女が訪ねてきた

20歳の時
人一人殺して
2年間逃げて
警察に捕まり
懲役4年を喰らい
牢獄にぶち込まれ
後悔をしながら
淡々と待ち続けた
「後20日……」
俺は見慣れた
天井を見ながら呟く
獵山 大和 カリヤマ ヤマト
俺の名
だが4年間
その名を使っただのは数えるほど
当然だ
服役中だからだ
刑務所に親しい囚人はいない
むしろこっちから願い下げだ
人道をはずれた連中だ
親しむ理由もない
俺は人を殺したが
人道をはずれた覚えはない
正当防衛だ
誰も信じてないがな
今さら主張する気もない
だがあと20日で俺は自由だ

もう刑務所なんて二度とゴメンだ
そんなことを考えてると

監視官が俺の独房の前に来た

監視官

「猟山 大和」

久々名前を呼ばれた

監視官

「お前に面会だ」

猟山

「面会だと？」

初めてだ面会なんて

裁判の時弁護士でさえ来なかった

監視官に連れられ俺は面会室にはいる

椅子があり前には透明の板

テレビで見たような部屋だ

そして俺は椅子に座る

すると向こうが入ってきた

背の低い女だ

女は俺の顔を見ながら椅子に座る

女

「猟山 大和さんですね」

猟山

「そうだ」

女

「初めまして」

初対面での挨拶をしてくる

女

「今日はお話があつてきました」

俺に話？

女

「後20日で出所ですけど、あなたは出所後あてはありますか？」

獵山

「ない」

正直に答えた

嘘をつく理由もない

女

「それじゃ出所後は私の所の事務所で働きませんか？」

獵山

「は?!」

あまりにも意外だった

名前も名乗らず

いきなり私の事務所で働きませんか?って

発言する順番おかしいだろ!

取りあえず何の事務所か聴かなければ

獵山

「事務所って何の?」

女

「探偵事務所」

.....

俺は啞然とした

服役中の奴に探偵事務所で働きませんか?って

誘う相手間違ってるねえか?!

獵山

「嘘だろ」

女

「本当です」

獵山

「何で俺が?」

女

「貴方は逃亡時、18回にわたり検問を突破、職務質問も簡単に突破してます。自分は犯人と気づかせずにね」

人のこと調べあげやがって

女

「潜伏先を突入しても、すべて数時間前に痕跡を消して逃亡」

嫌な奴だ

人の事で盛り上がりやがって

女

「そしてあの完璧な包囲網突破事件！」

俺をそっちのけで語る

女

「あれは並の才能では出来ないことですよ！是非うちの事務所での才能を生かして貰いたくて」

獵山

「けど結局捕まっちゃったんだぜ」

嫌みを言う

自分の話題なのだが

女

「でも貴方はあの時逃げようと思えば逃げれたはずです」

どこまで知っているんだこの女…

獵山

「逃げようと思えば逃げれたかもな」

女

「かもじゃないですよ！！確実に逃げれてました！！」

何でこいつがムキになるんだ

女

「とにかく貴方が必要なんですよ！！」

何で俺は怒鳴られてんだ？

女

「あ…もうこんな時間」
女が腕時計を見て確認する
女

「返事は出所日に聴きますね。それじゃ」

ボタン…

勝手に誘って

勝手喋って

勝手に帰りやがった

名前も名乗らず…

………

獵山

「何だっただんだよあいつ」

呆氣に取られながら

監視官に連れられ

元の独房に入る

正直今まで無氣力に生きていた

活氣があつたのは

逃亡時だけだ

捕まりたくねえから

と言う理由で

緊張感にあふれ

警察を出し抜くのに

快感を覚え

逃亡を楽しむ俺がいた

それに捕まる数時間前までは

活氣があつた

だが俺は潜伏先から逃亡する準備をして
いざ逃げようって時に
ふと変なことを考えてしまった

逃げるのか？

何故？

捕まりたくねえからか？

何時まで逃げるのか？

時効までか？

後13年もか？

独りでか？

独りでか？

独りでか？

独りで後13年逃げ続けるのか？

孤独……………

その言葉が俺を諦めさせ
また無気力になった
そして無抵抗のまま捕まった

獵山

「後…3日」

天井を見ながら呟く
あの面会の日から
また変わらず無気力に
獄中生活を送っていた
だが実際誘いの事で
悩んでいた

（「とにかく貴方が必要なんですよー！」
）

女の言葉がよぎる

俺が必要か…

初めてだった

必要だ何て言われたのが
妙な気分だ

このまま誘いを蹴ると

このままずっと孤独にいる気がする
だが本当に信用していいのか
俺は人を信用したことはない

出来たことがない
そんな事を考えていると
監視官

「猟山 大和」

突然監視官がやって来て
監視官

「手紙だ」

と手渡された

何気にエアメール

差出人の名前がない

取りあえず開けてみる

” 猟山様へ

後数日で釈放だそうですね
けど私達は貴方を許さない
私達からあの人を奪った
絶対に許さない
許さない

遺族より
”

遺族からかよ

短けえし

嫌がらせかよ

愚痴を言いながら

手紙を破り捨てる

俺は罪悪感などない

正当防衛だからな

夜考えて

俺は決めた

誘いを受けると

あの女が言っていた

俺の才能とやらが

探偵事務所に

どう使えるのか

俺が必要と言った意味とは

何故事件の詳細を知っているのか

様々な疑問があつた

後日全部聴いてやる

あと序でに名前も

出所前日夜

俺は荷物をまとめていた

4年間の懲役を終え

とうとう明日出所

もう絶対こんな所こねえ

そう自分の中で誓った

風呂

便所

飯

肉体労働

規則

何もかもが最悪だ

そんな所から出れるとなると

思わずテンションが上がる

何とかテンションを抑え

明日に備えて寝る

午前中には手続きをすませ

昼には出所

どうせ手続きの大半が話だ

再犯防止のため

とか

言われなくても

絶対こんな所来るような事はしねえ

つか明日あの女がいるかな？

いなかったら仕事が見つかるまで

ホームレス暮らし決定

いたらいたでなあ

ややこしい事になりそうだ

.....

いろいろ考えてたら

いつの間にか寝ていたようだ

適当に手続きを済ませ

長ったらしい話を聞き流し

そして今刑務所の門の前に立っている

門が開く

俺は歩き出す

門の中心より

一歩前に足を出した

俺はこれで自由だ

自由だ.....

「あ、いた!!」

人が感動に浸っていると

デカイ声で

俺に向かつて

「獵山さん！！、こんにちは」

あの女だ

叫びながらこっちに走ってくる

何だ

この親しげな挨拶は

何時からそんなに仲になった？

女

「返事聴きに来ました」

その前に俺は

獵山

「先に名前を名乗れ」

女

「あ、まだ名前言ってませんでした？」

獵山

「言ってねえよ……」

呆れた感じで俺は言う

女

「朱鷺村^{トキムラ} 海璃^{カイリ}です」

ふう何だかんだで

やっと名前が判明した

朱鷺村

「それで御返事は？」

せつかちな奴だ

獵山

「あの誘い乗ったよ」

朱鷺村

「本当ですか！有り難う御座います！これから宜しく御願います

！」

獵山

「うん、これから何か簡単に決定したが
考えてみたら

具体的な事全く聞いていなかった…

刑務所から朱鷺村の車で移動中

獵山

「懐かしいなあ…」

思わず呟く

別に今車で走っている

場所を知っているわけじゃない

ただ

道路を車で走っている事

窓越しに見る建物

通行人

対向車

信号

車酔い

横断歩道

ん？

車酔い？

獵山

「うー!!…」

思い出した

俺は車酔いが酷い

やべえ

思い出した途端

吐き気が…

ヤバイ

吐く…

猟山

「ちよっ…と車と…めてく…れ…」

朱鷺村

「え…はい」

車が道路脇に止まる

俺はソッコーで近くの茂みに走る

ゲロゲロゲロ

情けねえ

朱鷺村

「あの…大丈夫ですか？」

何時の間にか朱鷺村が横にいた

猟山

「う…ゴホゴホ…!」

噎せる

朱鷺村

「事務所すぐそこだから歩いていきましよう」

朱鷺村の指さす方に

建物があつた

んで歩き出す

朱鷺村

「この3階ですよ」

到着した

建物は現代風の

5階建てビル

中は

1階 不動産屋

2階 新幸リフォーム

3階 朱鷺村探偵事務所

4階 空き

5階 西木整形外科

になっていると

看板に書いてあった

つか朱鷺村探偵事務所って

こいつ所長なのか？

獺山

「所長？」

朱鷺村

「うん、所長」

所長っぽい感じがしない

朱鷺村

「まあ所長って言っても私と獺山君しかないし」

………

獺山

「はあ？！」

朱鷺村

「だって1ヶ月前に設立したばかりだから」

聞いてねえ…

コレからどうなるのか
心配で仕方がない俺だった

……あれから2ヶ月

事務所の仕事にも慣れ
朝一番に出勤にも慣れ
事務所の雑用にも慣れ
朱鷺村の遅刻にも慣れ
依頼主の対応にも慣れ
つか新設したばかりにしては以外と依頼が来るものだ
一段落つき余裕もできた
第二の人生を楽しみたいものだ
刑務所暮らしは二度と御免だ

アレ？

そいや朱鷺村が言ってた俺が必要な理由って結局何だったんだ？

ダダダダダダ！

お、噂をすれば

朱鷺村

「セーフ！！」

獵山

「50秒遅刻」

朱鷺村

「そんなぁ」

獵山

「全く…自分が指定した出勤時間に遅刻するんじゃないよ」

朱鷺村

「実は今日は道端に猫が…」

始まった…

言い訳長いんだよなあ

獵山

「嘘決定」

朱鷺村

「え！！…何でわかつたの？！」

獵山

「はあ…」

毎日毎日

同じような言い訳しても

小学生でもわかる

本当に探偵か？

でもこんなオツチヨコチヨイな朱鷺村でも

俺にとつちや

孤独から這い上がらせてくれた人物

同時に信頼もくれた人物

朱鷺村 海璃

俺の大切な人

朱鷺村

「だあかあらあ」

獵山

「しつこい」

朱鷺村

「ぷう」

獺山

「そろそろ準備しないと昨日予約してきた依頼主が…」

ピンポーン

また今日も

自由で

気ままな

仕事が始まった

完

（後書き）

最後まで呼んでくれてありがとうございました。

一応初投稿です

話が急展開になりすぎました。

まだまだ力不足ですが

誤字脱字・御感想・御指摘ありましたら

是非お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0361b/>

孤独の叫び

2010年12月13日18時46分発行